様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００４４２

研究課題名（和文）『アエネーイス』の古仏語・中高ドイツ語翻案による古典古代文学の中世における受容

研究課題名（英文）Toward the Adaptation of the Ancient Literature in the Midde Ages by means of the Old French and Middle High German Translations of "Aeneis"

研究代表者
石井　正人（ISHII, Masato）

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：５０１７６１４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　ウェルギリウス『アエネーイス』(Publius Vergilius Maro: Aeneis)と、その古仏語への翻案ヴァージョン(作者不詳:Le Roman d’Eneas)と中高ドイツ語への翻案ヴァージョン(Heinrich von Veldeke: Eneasroman)を比較考察し、物語構造の変遷と時間概念の転位を中心に、古典古代の文学素材の盛期中世における受容、「汎ヨーロッパ化」「普遍化」「共通財化」のプロセスを明らかにする。
　中世ラテン文学との比較考察が不可欠であるとの結論に達し、中世最大のラテン詩文集成『カルミナ・ブラーナ』（Carmina Burana）の研究を開始した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ヨーロッパ文学を理解するためには、西洋古典文学の中でも、特にウェルギリウスを理解することが不可欠であるが、中世や近代におけるウェルギリウスの受容について総合的な研究が遅れている。本研究は、古仏語文学と中高ドイツ語文学におけるウェルギリウス受容を詳細に追い、この分野の研究発展に寄与した。同時に本研究は、古典古代文学の中世・近代における受容を研究するためには、これも研究がまだ進んでいない中世ラテン文学との比較考察が必要であることを明らかにし、『カルミナ・ブラーナ』の研究を開始して、さらにこの分野の研究水準を高めた

研究成果の概要（英文）：A comparison of Virgil's Aeneis (Publius Vergilius Maro: Aeneis), its adaptation into Old French (author unknown: Le Roman d'Eneas) and its adaptation into Middle High German (Heinrich von Veldeke: Eneasroman), focusing on the changes in narrative structure and the transposition of the concept of time, I will clarify the process of acceptance, "pan-Europeanization", "universalization" and "common goods" of the literary materials of classical antiquity in the high medieval period.
 I came to the conclusion that a comparative study with medieval Latin literature was essential, and began researching the Carmina Burana, the largest collection of Latin poetry in the Middle Ages.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ウェルギリウス　アエネーイス　古仏語『エネアス』　ハインリヒ・フォン・フェルデケ　中高ドイツ語『エネアス』　カルミナ・ブラーナ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

後世に絶大な影響を与えたローマ古典文学のウェルギリウスにおける「戦争・平和・統治」観、オウィディウスにおける「恋愛」観、ホラティウスにおける「倫理」観は、ヨーロッパ文学を歴史的比較文化史的観点から研究するのに不可欠のテーマであり、私の一貫したヨーロッパ古代中世比較文学史研究において不可避の研究課題であるが、彼らが後世のヨーロッパ文学に与えた影響ついては、そのテーマ性の大きさ、多様さから、基礎研究や周辺研究の確認に十分に時間をかけてきた。中世牧歌の研究においてオウィディウスのエレギアとウェルギリウスのブコリカとの比較考察を経て、今回満を持し、大作『アエネーイス』に挑もうとするものである。

ヨーロッパ中世・近世文学研究は、偏狭なナショナリズムに蹂躙された時期もあったが、クルチウスやアウエルバハの水脈は保たれ、西洋古典文化の人文主義的伝統を主軸に「普遍性・凡ヨーロッパ性」を基礎にした研究方向が今や定着し、更なる発展を遂げようとしている。ハウク、ブムケ、ケーラー、ヤウス、ヴァプネフスキー等、1980 年代から 21 世紀にかけて活躍した「ネオ人文主義的研究」に育てられた次の代、次の次の代が今や研究の主力を担う時代となり、この研究史の流れの申し子である Silvia Schmitz らがウェルギリウスの中世ドイツにおける受容に関して大きな成果を発表することになった。

□Udo Schöning: Thebenroman - Eneasroman - Trojaroman.Tugingen, 1991
□Silvia Schmilz: Die Poetik der Adaption: Liteerarische Inventio im ‚Eneas‘ Heinrichs von Veldeke. Tübingen, 2007
□Valentin Christ: Bausteine zu einer Narratologie der Dinge. Der >Eneasroman< Heinrichs von Veldeke, der >Roman d’Eneas< und Vergils >Aeneis< im Vergleich. Berlin, 2015

Schmitz らの研究は見事なものだが、「ネオ人文主義的研究」にありがちな、西洋古典文化の教養を静的に捉え、これに文化史の動因として過大な役割を与えるという基礎的名欠陥があり、これが比較文化研究の視点を更に大胆に広げるための足枷になっている感があるのを惜しむところある。本研究はまさにこの点に、能動的な翻訳受容史の観点から再考察を行い、研究の修正と発展を目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、ウェルギリウス『アエネーイス』(Publius Vergilius Maro: Aeneis)と、その古仏語への翻案ヴァージョン(作者不詳:Le Roman d’Eneas)と中高ドイツ語への翻案ヴァージョン(Heinrich von Veldeke: Eneasroman)を比較考察し、物語構造の変遷と時間概念の転位を中心に、古典古代の文学素材の盛期中世における受容方法を調査することで、その「汎ヨーロッパ化」「普遍化」「共通財化」のプロセスと本質を明らかにすることである。

３．研究の方法

本研究の方法は、アエネーイスのラテン語原文と古仏語・中高ドイツ語翻案版のテクストを比較検討し、物語の「統一的時間軸」の確定手段と、その変遷を調査する。物語における「統一的時間軸」確定手段を次の 2 点において捉える：1．動詞時制・接続詞・副詞等の文法カテゴリーによってエピソードの前後関係を明確にする。2．エピソード連結の終結（区切り）を納得させる「終止感・解決感」を内容的に（倫理的にあるいは価値観的に）明確にする。

４．研究成果

言語学的にテクストを考察するなかで、モダリティへの考察の広がり、語用論的考察への拡大、語彙の文化史的考察への進展を、特に Festus の辞典の伝承と関連させる形で研究が発展した。更に研究を発展深化させるためには、古典ラテン語テクストと中世ヴァナキュラー語翻案テクストの比較対照の間に、中世ラテン文学という比較対象を置くことが不可欠であるという結論を得るに至った。
この関連で、中世ラテン文学の中でも、特に最大のラテン語詩文集成『カルミナ・ブラーナ』（Carmina Burana）を取り上げ、その成立・再発見・受容の歴史を考察した。中世ラテン文学の中でも、『カルミナ・ブラーナ』は中世ラテン語・中高ドイツ語、あるいは中世ラテン語・古フランス語混淆詩（Mischgedicht）という特殊な、しかし貴重な文学史上の史料を含み、ラテン世

俗文学の伝承を考察する上で最良の研究対象だと考えられるからである。
　『カルミナ・ブラーナ』の受容史・研究史は、そのままロマン派以降の中世ドイツ文献学・中世ラテン文献学の研究史と重なっており、西洋古典の作品を通じた近代ヨーロッパの自己理解が進展する歴史の縮図であった。この文脈の中でこそ、ウェルギリウス受容史はとらえられなければならなかったのである。
　これをもって本研究を発展的に閉じると同時に、次の研究テーマへの足がかりとした。
私事に渡って恐縮であるが、この段階の報告論文となる「カルミナ・ブラーナとその時代」が、私が千葉大学を定年退職するにあたって行った最終講義のテーマともなった。今を去ること 40 年以上前に、研究者としての人生の始まりに、私が最初に印刷物にして公開した論文が『カルミナ・ブラーナ』の中高ドイツ語詩に関する論文であったことを思えば、私の研究人生をかけた本研究に一区切りをつけるには相応しい結果であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 石井正人	４．巻 375
２．論文標題 カルミナ・ブラーナとその時代	５．発行年 2023年
３．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書『文化交流研究』	６．最初と最後の頁 1-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石井正人	４．巻 373
２．論文標題 Z世代のクリスマス・イメージ	５．発行年 2023年
３．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書『高等教養教育研究』	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石井正人	４．巻 373
２．論文標題 ホームズとルパンの翻訳小史―「ポピュラーカルチャー論」授業の教材として	５．発行年 2023年
３．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書『高等教養教育研究』	６．最初と最後の頁 13-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石井正人	４．巻 369
２．論文標題 大震災を描くリアリティ―リスボン大震災と文学・思想―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府プロジェクト報告書『高等教養教育研究』	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 370
2．論文標題 ゼウクシスの”笑い死に”について	5．発行年 2022年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書『文化交流研究』	6．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 352
2．論文標題 ラテン語の conjugatio periphrastica について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 350
2．論文標題 新しい数理・データサイエンス教育のために ： 人文科学研究のための LaTex2e による多言語処理入門	5．発行年 2020年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 343
2．論文標題 アンナ・ゼーガース『第七の十字架』コミック版(1942)について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 341
2．論文標題 「ポピュラーカルチャー論」の教材としてのJR東海CM ： 「そうだ京都、行こう」と「うまし うるわし 奈良」シリーズにおける音楽の効果	5．発行年 2019年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 337
2．論文標題 宇多田ヒカル「真夏の通り雨」講義 ： 「ポピュラーカルチャー論」の教材として	5．発行年 2018年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 2-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石井正人	4．巻 336
2．論文標題 音韻組織とモーラ再考 ： 柳澤・荒井「フォルマント遷移とインテンシティの減衰が促音の知覚に与える影響」(2015)を参考に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 2-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

千葉大学文学部　石井正人のブログ https://blog.so-net.ne.jp/MyPage/blog/home/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関